

想像の中の会計という世界

Imagined Worlds of Accounting



あなたは現実を見て問いかける、どうして
そうなのか。しかし、私は現実とは違った
可能性を想像して問う、なぜそうでないのか。
ジョージ・バーナード・ショー

科学者の歴史的役割は、想像もつかないこと
を行い、既成概念を打ち壊し、そして神々を
弑することなのだ。

J. B. S. ホールデン

平成19年2月9日、関西大学及び関西学院大学アカウンティング・スクールの主催、りそな銀行の協力のもと、両大会計学研究会の学生が運営の中心となり、アメリカ会計学会会長シャム・サンダー教授（イェール大）の来日記念特別講演会が大阪で催された。教授の昨年の学会会長就任講演（「想像の中の会計という世界」）に基づく本講演は、会計基準の将来に関する第一部、会計研究教育に関する第二部の二部構成となっている。なお、本講演実現に当たっては、サンダー教授より格別のご厚情を、また、斎藤静樹日本会計研究学会会長及び平松一夫関西学院大学学長より多大なるご支援を得た。以下、紙数の都合で一部割愛のうえ、翻訳を掲載する。

（翻訳文責：青山学院大学助教授・りそな銀行監査役福井義高）

第一部 会計基準の将来 ——統一か競争か

◎はじめに

人間は地球上に存在する数限りない種のうちで特別な性質を持つ。ユーモアのセンスを持ち、現実に存在しないことを想像できるという二点で、他の種とは異なっている。ユーモアのセンスについてはともかく、古今東西の人類文明とその成果は全て我々の想像の産物である。誰かがこうしたことを最初に頭の中で想像しなければ、実際に実現することはなかっただろう。

科学技術にとどまらず、すべての学問そして我々の社会的・政治的・経済的組織もまた、我々の想像の結果である点で、人工の産物である。組織構築技術の驚異ともいべき現代企業は、想像力なしには存在しえない。個々人の異なる利害と本質的に分散した知識の所在という遠心力のなかで企業を運営するためには、我々は人間の想像力のすぐれた功績のひとつである会計を必要とする。私のイェールでの同僚で古代バビロニア研究者のウィリアム・ヘイローが明らかにしたように、会計もまた、数学・文字さらには文明自体に先行するか同時に生じた人間の想像力の産物なのである。

もし、想像力が我々の専門分野である会計も含めてすべての人間社会の発展の源泉であるならば、現在そして将来における会計のあり方についても想像をめぐらすことは無益ではなからう。会計研究とは、現実がどうなっているかのみならず、どのような可能性があるのかを考察することでもありと考えられよう。

将来についてどのような異なったシナリオを書くことができるだろうか。予測と社会改良だけがこうした問いかけの動機ではない。もし世界が変化するものであれば、現在の会計や監査

体制とは別の可能性について考えることが我々には必要である。この世界の変化が良い方向であるよう願うのであれば、別のシナリオがもたらすだろう結果について考えることも必須である。想像力は会計研究・教育の本質的要素でなければならない。こうした視点で我々の仕事を見てみよう。

研究では革新が評価される一方、実務では伝統が重視される。確かに制度の安定性にはそれ自体価値がある。制度の安定性は、比較研究を行う際に決定的に重要な時系列データを提供してくれる。では、なぜ変化が起こるのを待つ、あるいは強いられるのを甘受する代わりに、自ら現実とは別の可能性を想像せねばならないのか。それは、我々の子供たちがより良い世界で生きられるよう、実務と制度に革新をもたらすには想像力が必要だからである。

◎我々を取り巻く環境

まず我々を取り巻く環境から始めよう。七十年ほど前にアメリカで連邦証券取引法が導入されて以来、どのような会計処理方法が認められるのかを決める責任が、徐々にしかし不可逆的に、規制当局による処罰権限に裏打ちされた公的会計ルール・基準に移ってきた。一般に認められた会計原則いわゆる GAAP は、本来明らかに社会慣行に由来する概念であったのに、規制と会計基準を説明するものになった。想像してみよう、一般に強制された会計原則に、如何にして「一般に認められた」というラベルが貼られるようになったのか。瓶は同じであっても、中身はもはや同じではない。

想像してみよう、社会的ネットワークと是認によって形成されるビジネス及び会計の世界に

〈講演者略歴〉

シャム・サンダー Shyam Sunder

イェール大学教授（経営大学院ジェームズ・L・フランク講座）・アメリカ会計学会会長（2006～2007年）。カーネギー・メロン大学 Ph.D.。現在、世界で最も注目される会計学者の一人であり、かつ、その関心・業績は会計にとどまらず、経済学・ファイナンスへの造詣も深く、とりわけ実験経済学者として著名。さらに、日本社会・経済にも深い関心を寄せ、1995年には神戸大学客員教授として日本に滞在。



おける社会慣行と、権力による罰則を背景とした公的基準とルール、より良いバランスを目指す世界の可能性を。巨額の金銭的利害がかかった状況においては、社会慣行だけでは機能不全に陥ることは否定しない。しかし、それは規制と法律だけに頼る場合も同様である。答えは、両極端にあるのではなく、この二つの思慮に満ちた組合せにあるのではなからうか。想像してみよう、現状よりも望ましいバランスを目指すよう努力することを。

こうした想像をナンセンスと考えるのであれば、法律について考えてみよう。もし誰かが犯罪者と糾弾され、裁判になった場合、手続きの最後には、判事は陪審員に向かい、被告は合理的疑いの余地なく有罪かどうかを問う。陪審員はこう聞き返すかもしれない、裁判長閣下、どれほどの疑問の余地があれば合理的なのでしょう。一、三、五あるいは二十パーセントでしょうか。判事の回答は、被告の生死にすらかわる決定を行うに際し、陪審員自らの社会慣行の中で培われた規範意識と判断に基づきなさい、というものだろう。もし、判事が会計の世界から来たのであれば、回答はたぶん三パーセント、そしてその結果は特別目的会社、エンロンとファストウ CFO である。

想像してみよう、法がどのように機能しているのかを会計人がよく理解し、議会と裁判所が最終判断を法律の込み入った事情など知らない一般市民である陪審員に任せている世界を。想

像してみよう、どんなに精力的かつ思慮深くルールや規制を明確化し適用しても、曖昧にしか定義できないしよく理解されているわけではない社会慣行と是認の助けなしには、うまくいかないということ。 「ルールを明確に」という要求は、皆さんには紛れもない正論に響くかもしれない。ただし、そう考えるのは、弁護士である我が娘リーチャが法の世界での「抜け穴探しのための工程表」と私に語ったものを世の中に提供するに過ぎないということを皆さんが理解するまでの話であるが。

詳細なルールがないと、顧客企業にダメと言うのが難しい、とはしばしば聞かれる言である。しかし、顧客が望むものを全て与えるのは専門的職業人の証ではない。想像してみよう、会計専門家が、自らが受け取る数十万ドルにも及ぶ報酬は、サーチ・エンジンを使って該当するルールを検索することではなく、プロとしての判断の行使に支払われているということを理解した世界を。どのような職業であれ、判断業務の比率が下がるほど、報酬は低くなる。想像してみよう、この真理とその帰結をしっかりと認識する世界を。より詳細なルールをノーウォークの FASB やロンドンの IASB に要求するのは短期的には都合の良いことかもしれないけれども、最終的には会計人の首を絞めることになるのだ。

想像してみよう、規制当局が会計用語の有権的定義を公表することをやめた世界を。ビジネ

スの言語として、会計は自然言語といくつかの基本的特徴を共有している。想像してみよう、言葉の有用性は、それが持つ不確定性—意味の外縁の曖昧さ—にあるのを理解することを。もし、完全に同じ対象だけにしか使えないのであれば、「猫」、「家」あるいは「資産」であれば、あらゆる言葉の価値が失われてしまう。現実の使用における判断と変動の中心性こそ、全ての自然言語の本質である。世界の普遍言語を意図して十九世紀に作り上げられた 에스ペラントは、我々が如何に言語を使うかについての誤った理解に基づいていたため、最初から失敗を約束されていた。想像してみよう、会計で同じ悲惨な過ちを繰り返さないことを。英語の活力は、権威からではなく、我々が意思疎通を行う際に許された自由から来ている。会計を含めたいかなる言語も、国家の懲罰的権威の庇護のもとで、花咲くことはできない。

想像してみよう、会計は複雑な社会現象の一部分であることを。国家の懲罰的権威を通じて強制的基準を設定しようという傾向は、デカルト的世界観に発している。こうした発想は、我々には世界に対する十分な理性的理解力があり、望ましい目的達成のために社会構造を設計するのに十分な知識があると仮定している。しかし、とりわけ会計において、我々の現在持つあるいは将来得られるだろう知識が、ビジネスと会計に対するデカルト的世界観を正当化できるといふ、いかなる証拠も存在しない。

想像してみよう、命令し管理するという観点の代わりに、予測できない事象群とそのほとんど解明されていない相互関係を通じて複雑な現象が生じるダーウィンの世界を。我々の経済において、知識は根源的に分散している、とはハイエクの言である。どれほど賢明で慈悲深くとも、中央集権型権力によって、特定の目的を果たすために社会や生物システムを知り尽くし設計することは不可能である。

四半世紀にわたって無視され続けた後、ハイエクの見方の正しさが証明され、計画経済の失

敗に関する議論の決着はついた。命令し管理することを通じて上から会計を標準化しようとする中で、会計人は計画経済の誤りから学ぶことを拒まねばならないのだろうか。自業自得ともいふべき誤りを繰り返すことによって、最終的にその誤りを思い知るまで、我々はさらに百年を失わなければならないのだろうか。想像してみよう、他者の誤りから学んで会計に活かすことを。

ヘッジ会計基準である FAS133 がなぜこんなにも複雑なのか、みなさんには驚くべきことであろうか。規制当局が金融派生商品という怪物を手なずけることが極めて難しいのも、たぶん、こうした商品のほとんどが、まさに会計基準が設定したその時点での制約を回避するために生じた、会計ルールの申し子であるからだろう。想像してみよう、新しいルールを作成するために数年を費やす規制当局と、新しいルールの裏をかくために新規金融派生商品やリース契約を数分で企画する投資銀行の間でゲームを続けた場合の帰結を。想像してみよう、規制当局と財務報告主体のゲーム構造を無視すれば負けるのは規制当局であることを単に認識するだけで、どれだけ多くの労苦が防げるかを。

想像してみよう、財務報告主体が選べる会計処理の選択肢を減らすのではなく、逆に増やすことを。その結果、財務報告書が我々に伝える情報は増えるのかそれとも減るのか。情報が減るといふ議論はよく知られている。それほど知られていないのは、選ぶということで、内部情報が明らかになる—許される会計処理の選択肢が少ないほど、選択と行為が明らかにする情報も少なくなる—というノースウェスタン大ロナルド・ダイ教授らの議論である。減価償却において定額法ではなく定率法を選ぶ企業は、自社の将来についてより高い信頼を置いていることを投資家に明らかにしているのかもしれない。財務報告における統一化のドグマは選択を通じたシグナルの価値を無視しているのではないだろうか。

想像してみよう、FASBの背後に控えるSECの権限と、IASBの背後に控えるEUとその他各国政府の権限を取り去ることを。それぞれの管轄内で、当局が最低二つ、たぶん三つか四つの会計基準設定機関の存在を認めるのである。当該管轄下の企業には、自らが従うことを望む会計基準を選ぶことが許される。こうした基準設定機関はその会計基準を採用した企業からの使用料以外の財源に頼らない。こうして各基準設定機関は使用料をめぐる、互いに共謀あるいは調整するのではなく、実際に競争し、自らの会計基準を選んだ企業の資本コストを下げるべく、難しい選択を強いられることになる。

こうした下からの競争を経て、基準の収斂が起こるかもしれないし起こらないかもしれないけれども、それは重要なことではない。こうしたプロセスから生じるのは、投資家その他がルール設定者間の競争で可能となった代替案の提示を如何に評価しているかについての、市場からの貴重なシグナルである。こうしたシグナルは政策決定に関しても貴重な指針となる。これは現在の独占体制では得られない機能である。結果は異なった内容の会計基準、あるいは同様に重要なことは、ある種の余分な基準が消えてなくなることであろう。こうした競争が最低品質に向けた競争になるという如何なる証拠も存

在しない。我々の想像力を今一步進めることでどんな害が生じるというのだろうか。

想像してみよう、それぞれの会社が自社の財務諸表に関する不適切表示損害保険に加入することとし、保険会社が自らの利益を守るために監査を行うようにすべきというニューヨーク大ジョシュア・ローネン教授の提案を。想像してみよう、財務諸表が企業の状態と業績を公正に反映しているかどうかについての争いを解決するため会計裁判所を創設するというアーサー・アンダーセン元会長レナード・スパチェックの埃を被ったままの提案をもう一度取り出してくることを。

最後に、想像してみよう、税務報告と財務報告を一体化し、企業が株主とともに税務当局に対しても、利益をいくらかと報告するかについて広い範囲の裁量を認めるような世界を。片方に報告する金額がいくらであれ、もう片方にも同じ額を報告しなければならない。たぶん、これにより、企業は利益報告をどちらかの方向に色をつけることの帰結を、責任を持って引き受けざるを得ないわけで、税に関する法規制、会計報告に関する基準、そして、一方ではIRS係官、もう一方では独立会計監査人による二重の監査の重荷をかなりの部分和らげることができるだろう。

第二部 会計研究教育の将来

——好奇心あふれる若者への期待

◎会計研究

次に、我々の会計研究の世界に戻ろう。想像してみよう、知りたいと思っているのにまだその答えを知らない疑問を追求する好奇心が研究者を動かす世界を。この世の中を良くするのを助けることとともに、自らの好奇心を満足させることは楽しいことである。

想像してみよう、我々の大学院が自分たちの住む世界をより良く理解したいという強い好奇心に導かれた若き青年男女をひきつけることができたらと。たとえそれが我々の理論を覆し、著名な生物学者J. B. S. ホールデンが示唆したようにこの分野の神々を弑することになったり、彼ら自身の学問上の父たちを無き者にする事となっても。

知的活動における若者の優位は例外ではなく

原則である。大学院在学中の業績でノーベル賞を受賞した研究者のリストは、私がここで思い出せる数をはるかに超えている。想像してみよう、我々の大学院生が、大きなアイデアに狙いをつけて、それがもたらす大きなリターンへの希望を胸に、失敗のリスクを敢えて取ることを。もし、指導教授の助言にただ素直に従い、教授になるまで決まりきったことを繰り返していたら。教授になったときには、こうした研究のスタイルを変えるには年を取り過ぎているのだ。

想像してみよう、我々古い世代は若い世代の研究者に比べこれまでの研究については良く知っているという点で優位ではあるものの、彼ら若者にはこうした知識に制約されて考えなくてすむという有利さがあると、我々が彼らにきちんと伝える世界を。ゼロから考えられるという彼らの白紙の状態は、我々が滅多に言及することのないそれ自身が大きな財産である。想像してみよう、我々の退屈な講義やつまらない必読文献リストに代えて、知性豊かな若者に自ら疑問を探して答えを出すよう求めることを。そうすれば、我々みんなにとって望ましいことではなかろうか。

想像してみよう、我々の研究が新しさだけを追い求めるのではなく、我々の学問分野における思考方法の歴史を振り返り、複雑で相互的、しばしば密接に絡み合ったそれぞれの理論の関係を理解することを。

ファイナンス、経済学、マーケティングそしてオペレーションズ・リサーチといった隣接分野では、研究成果が実務に大きな影響を与えている。想像してみよう、専門的職業により近く存在すると考えられており、業界から資金的にも恩恵を受けている会計研究もまた、会計の実務に何らかの影響を及ぼし始めることを。今日、こうした実例をいくつか挙げるのさえ難しくなっている。

想像してみよう、会計の教育者である我々が、なんでもいい、自分自身にとって一番興味ある

ことを行うことを。想像してみよう、学術論文発表だけに基づく窮屈な標準的昇進システムに縛られることなく、各人が最も得意とする分野で成果を上げるよう全力を尽くし、なんであれ、自分で選んだ学術的活動での卓越さで評価される世界を。

◎会計教育

会計及び会計人の一般的イメージには改善の余地があると思う人々がいる。想像してみよう、どうしてそうなのか、我々はどうすればよいのか。ほとんどの人にとって生涯一度の会計学との直接の出会い、大学での会計学入門の授業ひとつだけであろう。我々教師には単純であまりに自明な、借方と貸方、貸借対照表とキャッシュフロー計算書が、たとえ難しくはないにせよ、なぜ多くの学生をこれほど当惑させるのだろうか。

大学の授業というものは大抵、当該分野の大きな問題について問いかけることから始めて、学生がその大問題に対する一般的解答を学ぶことを促すものである。我々の住む世界あるいは社会に関する疑問、その重要性が学生たちにも直ちに明らかな疑問を彼らに提示することで、答えを見つけ理解することを促すのである。一度問題の所在とその重要性を理解すれば、学生は二度とその答えを忘れないだろう。

ところが、私が知る限りでは、会計学の授業においては全然違ったことが行われている。我々は、学生にすぐにその重要性が明らかな問題について問うことから始めないのだ。その代わり、学生にはそれが何を意味するのか明らかにすることはめったにしないで、問題を読み、暗記し、解答させることから始めている。私は何が言いたいのか。

貸方と借方そして財務諸表は、人間社会の非常に重要で難しい問題に対処するために作り上げられた巧妙な答えなのである。その問題とは、本質的に利己的であるとともに寛大な傾向も持

った人間というものを、如何にして富と繁栄を作り出すために協力させるかということである。借方と貸方、貸借対照表と損益計算書、予算と費用管理は、我々が何世紀にもわたってこの問題に対処し、豊かになるために形成してきたひとつの答えである。

それなのに、我々は滅多にこの根本的問題を学生に問いかけることから授業を始めようとはしない。想像してみよう、学生に興味を持たせ、我々が教えることを興味深いものにする方法は、学生にこの根本問題の存在に気づかせ、その答えが知りたいという欲求を起こさせることではないかと。そうしてこそ、自らが直面する特定の状況でこの問題に対する自分自身の答えをどうやって見つけるか、学生が学ぶことを支援し、他の人が見つけた答えの数々をも教えることが我々にはできよう。借方と貸方、発生主義に基づく様々な手法が、こうして、自らが経験する場で自分自身の答えを求めることができるよう、学生に創造性を活かす余地を残した解答となるのである。

想像してみよう、会計基準が学校及び実務教育に与える影響を。教科書、カリキュラム、試験そして授業でのやりとりによつてどのような影響を及ぼすだろうか。会計教育における焦点が、実務で直面するいかなる状況においても最善の対処法を考え出せるよう会計職業人を鍛えることから、ルール・ブックから答えを探すように訓練することに移っていないだろうか。もっぱら予め決まったルール集を暗記することからなる学問を学んだり教えたりすることに才能ある若者をひきつけることができるだろうか。成文化された会計基準に謳われた公式見解に対する対案はまかり成らぬ、と規制当局が宣言した途端、考える力は価値を失ってしまう。

想像してみよう、会計基準が企業経営者と会計監査人の対応に与える影響を。基準化とは、関連する問題を熟考した後に難しい決断をすることのまさに対極にある。会計基準は、自らの判断に対して個人的に責任を取らなくてすむよ

う隠れ蓑を提供しているのだろうか。三十年に及ぶ会計における「黄金律」の飽くなき追求の後、我々が熱望した対象は単なる愚者の黄金だったことが昨今のスキャンダルによって露呈したのはなぜだろう。統一された会計という夢をいくら追いかけても、そんなものは蜃気楼に過ぎないということが繰り返し明らかになってきたのはなぜだろう。

想像してみよう、「ブルータス、罪は星にあるのではない、我々自身にあるのだ」と。

◎おわりに

ここまで、みなさんに私の貧弱な想像を披露してきた。もちろん、この他にも、みなさんの心の中に浮かんだかあるいは潜在意識の下にある未だ表現されざる数々の想像があるだろう。それらのうちどれが、もしあるとすれば、実現するに値する想像であろうか。どれが、誰かが努力して実現する想像であろうか。実現しようという努力が実を結ぶのはどれであろうか。これらの問いに対する答えを私は持っていない。しかし、これだけは断言できる。現実はまだ存在しないものを想像することなしに、世界は変わらないということ。バーナード・ショーに見習い、なぜそうでないのか、と問うことなしに、我々自らが非正統的で反抗的な考えを実現しようとするリスクを喜んで受け入れることなしに、世界は変わらないのだ。

会計学が学問分野として発展するために、会計職業人が社会貢献の光栄ある伝統を保持するために、今までとは違った会計の将来像を想像することを自らに許容して行かねばならない。現実のあるいは想像された形での会計の力に感謝し、さらに探求しよう。夢を共有しよう。我々人間にだけ与えられた想像するという力で、世界を変えるためにともに進もう。こうしてこそ、我々は自らの貢献の対価を社会から得ることができるのである。